

三つに分かれるとし、五位以上はその名を天皇に掌握される階層であったと論ずる。五位以上の罰則に関しては、坂上康俊氏の研究も参考になろう。

吉川聡「奈良加茂道の遡及的検討」は、奈良から東国へ抜ける道について、先行研究の多くは真北にのぼって木津に到り、そこから東へ伸びていったと論じていることに疑義を呈し、別ルートがあったことを論じる。近世や中世の史料を博捜し、まさに遡及的に論じている。おそらく現地をくまなく踏査されたとみられるユニークな方法は野心的で、かつ非常に説得力がある論考といえる。

佐藤泰弘「青苗簿についての基礎的考察」は、これまで同一のものと考えられてきた霊亀と延喜の青苗簿が異なるものであると考へ、前者は郡作成のもの、後者は国作成のものとし、国作成の青苗簿は承和年間に成立したとする。また青苗簿は十世紀以降の検田帳などにつながるものとし、重要な役割を果たしたと考へる。史料の乏しい青苗簿に関する新知見は示唆に富む。

前田禎彦「検非違使庁における〈見決〉

の性格と役割」は、検非違使庁の刑罰のうち、これまでほとんど研究のなかった〈見決〉について着目し、〈見決〉が検非違使庁官人によって恣意的に行われる場合もあり、検非違使庁の権威をより深く浸透させる役割をもっていたと論じる。おそらく氏は、検非違使庁に属する人びとを一つの社会集団と考へており、本書所収の榎木謙周「古代の「清掃」と国家の秩序」、西山良平「平安京施薬院・悲田院考」とあわせ、戸田芳実氏以来の社会集団論を深化するものとなっている。

栄原永遠男「正倉院文書からみた甲賀寺」は、主に正倉院文書を用いて、天平十九年五月から勝宝三年十二月のあいだに、甲賀寺が近江国分寺に変化したと論ずる。正倉院文書を用いた着実な研究で、論証は手堅い。

紙幅の都合上、他の論文すべてを紹介できないが、四十枚という枚数制限がありながら力作が多く、今後の研究に寄与する論考ばかりとなっている。是非手に取り、各論文を味読することを強くおすすめしたい。

(有富純也)

高橋慎一郎編

『列島の鎌倉時代——地域を動かす

武士と寺社——』

高志書院 二〇一一年・二刊

A5 二六一頁 三〇〇〇円

本書は、二〇〇九年七月、帝京大学山梨文化財研究所で開催されたシンポジウム「列島の鎌倉時代——中世前期に地域社会の萌芽を探る——」の成果にもとづく、十名の執筆者による論文集である。目次を示そう。

I 村落の支配者 ①高橋修「東国の

郷・村住人と在地領主」／②高橋典幸「肥前の武士と鎌倉幕府」／③西田友広「石見益田氏の系譜と地域社会」／④高木徳郎「紀の川流域荘園の領域形成と在地領主」

II 寺社への信仰 ⑤高橋慎一郎「日光山と北関東の武士団」／⑥高橋充「会津の新宮熊野と新宮氏」／⑦湯浅治久「遠江蒲御厨と蒲検校」、III 社会の内と外 ⑧井上聡「伊予の地域社会と奈良の律僧」／⑨高橋秀樹「相模武士河村・三浦氏と地域社会」／⑩高橋一樹「北陸社会の交通と地域区分」

①は、常陸国吉田社領の有力住人らが、婚姻などで常陸平氏の一族を郷・村に迎え、数多の一族が郷・村に存立基盤を確保したこと、幕府が彼らの統制のために大掾馬場氏を郡地頭にすえたことで、領家小槻氏の荘園支配が実現していたことを指摘。②は、長嶋荘の小地頭を分析し、現地の御家人集団による主体的連帯が、立荘以前の郡司らのそれに起源をもち、そうした連帯が鎌倉幕府との接触により相対化され、地域社会を交容させていくとの見通しを示す。

③は、新出の周布家文書を利用し、益田・周布氏の系譜を復元したうえで、益田氏の所領が石見国府の立地する西部に、東国出身の御家人のそれが東部に集中することを指摘。④は、隅田・相賀・志富田荘などを素材に、荘園制的な領域支配が形成されるに際しての、在地領主のかかわりを重視すべきことを主張する。

⑤は、多くの別当を輩出した大方・関氏をはじめ、宇都宮・那須氏など北関東の武士団が護持する日光山が、地域社会の精神的中核となっていたことを指摘。⑥は、陸奥国新宮荘と地頭、新宮熊野の組織と信仰、

地域との関係などについて丹念にたどった基礎的研究。⑦は、蒲検校の屋敷と宗教施設が立地する蒲御厨の下村を検校の社会的基盤と評価し、用水の確保や島島開発、集村化の過程を、地域社会における検校の権力の推移とあわせて復元する。

⑧は、東大寺の学僧凝然と、彼を輩出した越智氏以下の地域勢力の関係や、都鄙の人的ネットワークなどについて、凝然が残した聖教の紙背文書をもとに論ずる。⑨は、地域社会の形成における親族関係の役割と、形成・維持の限界について、河村・三浦氏を素材に分析。⑩は、北東日本海水運を基軸とする都鄙間交通ルートの変遷や、国御家人の所領配置、北条氏得宗・名越流の機能分担などの観点から、首都京都の求心性により、北陸道に地域的な分節構造が現出することを明らかにする。

各論考は、文献史料の豊富な京都・鎌倉を検討対象から、あえて排し、南東北から九州にいたる、実にさまざまなフィールドを取りあげている。それぞれは、多様な切り口をとりつつも、「鎌倉時代」の「武士」と「地域社会」というテーマにはブレがな

く、論文集としての一貫性は、みごとである。今後の鎌倉時代史、地域社会史の可能性を実感させるにじゅうぶんな好著といえるだろう。
(熊谷隆之)

本郷恵子著

『將軍権力の発見』

〈選書日本中世史 3〉(講談社)

選書メチエ 468)

講談社 二〇一〇・九刊

四六 二四二頁 一五〇〇円

室町幕府は如何にして全国政権たるようになったのか。〈選書日本中世史〉シリーズの第三巻として公刊された本書は、室町幕府の統治構造の解明に取り組んだ意欲作である。本書の構成・概要は以下の通りである。

はじめに／第一章「鎌倉幕府の権力構造」／第二章「室町幕府の二頭政治」／第三章「文書」と権力」／第四章「細川頼之の統治構想」／第五章「禪宗と室町幕府」／第六章「公家政権の「継承する力」」／第七章「公家と武家」